

# 「仁安目録」の疑問点

小泊立矢

これまで発表された、国東半島六郷満山に関する、論文・報告のほとんどには、国東半島には平安時代末にすでに天台宗の寺院が六十四カ寺もあり、一大仏教文化の地を形成していたという意味のことを記している。その根拠となっている史料が、ここで述べようとする「仁安目録」すなわち『太宰管内志』所収の「仁安三年六郷二十八山本寺目録」なのである。内容は、本山・中山・末山の整然とした三山形式をとり、それぞれに本寺・末寺を配している。本寺二十八カ寺は法華経二八品によつたといわれ、宇佐宮を中心し、しだいに中山・末山と発展していったとされている。

## 仁安三年六郷二十八山本寺目録（『太宰管内志』より）

序分本山八カ寺	本山分末寺	正宗分中山十カ寺	中山分末寺	流通文末山十カ寺	末山分末寺
後山 金剛寺	辻小野 西明寺	足曳山 両子寺	大満房	見地山 東光寺	上品寺
吉水山 靈龜寺	小溪山 大谷寺	長岩屋山 天念寺	付属寺	大嶽山 神宮寺	願成就寺
大折山 報恩寺	西蓮山 間戸寺	金剛山 長安寺	光明寺	峨眉山 文珠仙寺	虚空藏寺
鞍懸山 神宮寺	中津尾山 観音寺	加礼川山 道脇寺	万福寺	石立山 岩戸寺	浄土寺
津波戸山水月寺	轆轤山 正光寺	久末山 護国寺	吉水山 多福院	夷山 靈仙寺	金剛山 報恩寺
西叡山 高山寺	妙覚寺	黒土山 本松房	唐溪山 彌勒寺	小城山 宝命寺	吉祥寺
良粟山 智恩寺	海見山 来迎寺	小岩屋山 無助寺	毘沙門 多宝院	龍下山 成仏寺	貴福寺
馬城山 伝乗寺	蓬花山 富貴寺	大岩屋山 応曆寺	丸小野寺	参社山 行入寺	杉山 瑠璃光寺
	清瀧寺	補陀落山 千燈寺	平等寺	西方山 清浄光寺	
	文伝寺	横城山 東光寺	真覚寺	懸樋山 清岩寺	

		良医山	西山寺		
		稱積山	慈恩寺		
		日野山	岩脇寺		
		鳥目山	愛敬寺		
		今熊山	胎藏寺		
		光明寺	胎藏寺		
		宝寿房	光明寺		
		随求房	宝寿房		

ところでこの「仁安目録」であるが、実際に仁安三年（一一六八）に成立したものであろうか。平安時代末から鎌倉時代・南北朝にかけての他の史料と比較検討してみると、いろいろな疑問点が出てくる。以下その疑問点の中から主なものを取りあげてみる。

① 山号

「仁安目録」には末寺の一部をのぞいて、すべての寺院に山号がある。もともと山号は、比叡山延暦寺・高野山金剛峯寺などのように、その寺が位置する地名をとって何山と称したものである。それが鎌倉時代に入って、禅宗が広まってくると平地に建立する寺にも地名以外の山号を付けるようになったという。

そこで確かな史料に出てくる各時代の寺院のよび方をみると、左記の例のように「六郷山何々寺」「六郷何々寺」と、寺の所在地である「六郷」を上につけて山号としていたことがわかる。

(例)

六郷山屋山

長安寺銅板経銘

保延七年（一一四一）

六郷山夷

余瀬文書

永仁三年（一二九五）

六郷山新熊野坊中

生桑寺大般若経奥書

貞治四年（一一三四）

時代も平安時代から室町時代の後半までにおよぶ。六郷山以外の山号がついた例としては、現在のところ文龜年間（一五〇一―三）の「余瀨文書」に出てくる「六郷山吉婆蘇山靈山寺」が最初である、すなわち「六郷山」以外の山号が付くようになったのは、室町時代中期以降のことで、「六郷山」以外の整然とした山号が付いている「仁安目録」は、その成立時期について疑問視せざるを得ないのである。

なおこの山号については、十四世紀後半から十五世紀前中期にかけて、国東半島に急速に広まった禅宗とも関係があると考えられるのではなからうか。

## ② 石屋

現在、半島内の随所に残る平安時代後期の木彫仏の中には、あきらかに岩窟内に安置されていたとわかるものがある。例えば真玉町無動寺の木造薬師如来坐像や、国東町岩戸寺の木造薬師如来坐像などである。このように、平安時代後期の窟内仏が分布するということは、「仁安目録」（『太宰管内志』所収）の成立した時期には、差し掛け程度の屋根を有した石屋の数が多かったと考えてもよいのではなからうか。書式等からみて疑わしい点もあるが、内容から見て、さして時代はかわらないと思われる、安貞二年（一一二八）の「豊後国六郷山諸勳行並諸堂役諸祭等目録」をみても、総数三十一か寺・石屋のうち、何々寺とつくもの一〇、何々石屋とつくもの十七、その他四で、鎌倉時代前期は石屋の呼称の方が多い。

ところが「仁安目録」の寺院の呼称の中には、石屋とついた寺は一寺もない。平安時代末には、山号・寺号を有していた寺が、六十年後に何々石屋とよばれるようになったのであろうか。平安時代末からの史料で六郷山寺院の推移を追ってみると、何々石屋から何々寺へと変化した例はあるが、その逆は一例もないのである。このことも一つの疑問点としてあげられよう。

## ③ 寺号

寺の呼称についても「仁安目録」は不自然なところがある。例えば、香々地町靈仙寺の場合、「仁安目録」成立の前年（仁

安二年)には「夷石屋」(余瀨文書)とあるのが、翌年の「仁安目録」では「夷山靈仙寺」、それが六十年後の安貞二年には再び「夷石屋」となっている。「靈山寺」の呼称は、前述のように文龜年間になってはじめて出てくるのである。しかも「夷山」と「靈山寺」とが結びつくのは、さらに時代が下がるのである。

次に、富貴寺(豊後高田市)について少しくわしく、寺号の変遷をみてみよう。

蓬花山富貴寺 仁安目録 仁安 三年(一一六八)

落浦阿弥陀寺 到津文書 貞応 二年(一一二二)

落 寺 宮成文書 永仁 六年(一二九八)

” ” 六郷山本中末寺次第并  
四至等注文書 建武 四年(一三三七)

” ” 永弘文書 康永 三年(一三四四)

落阿弥陀堂 富貴寺棟札 文和 二年(一三五三)

落 あみた寺 富貴寺文書 応永二年(一一四一)

フ キ 山 天念寺大般若經輿書 応永二年(一一四一)

蓮華山富貴寺 富貴寺文書 延宝 五年(一六七七)

このように、古くは「落寺」で、「富貴」の文字は「仁安目録」以外では江戸時代に入ってからである。ただ、成立年代は不詳であるが、室町時代後期に作られたと推定される「六郷山定額院主目録」には「万治山富貴寺」とあるので、「富貴寺」のよび方は室町時代後期ごろからかとも思われる。

結局、「仁安目録」所載の寺号には、ずっと後世の寺名もあるといえるのである。

以上あげた三つの疑問点からいえることは、「仁安目録」は、仁安三年に成立したのではなく、後世、早くとも室町時代後期に作られたものといえそうである。ということは、最初に記した、平安時代末には国東半島に六十四カ寺の天台寺院が存

在していたという点も再検討しなければならなくなる。

いいかえば、「仁安目録」の存在を前提に書かれているこれまでの論文も、十分検討する必要がある。筆者自身そうであるが、自分の論をすすめていく上で都合のいい史料があると、ついつい史料批判をおこたりがちであるが、史料が少なければ少ないほど慎重かつ徹底した史料の検討が必要だということである。以上簡単ではあるがこれまで、六郷満山研究の基本史料の一つとされてきた「仁安目録」について、いくつかの疑問点をあげ、その成立時期を考察してみた。なお「仁安目録」が後世の作であるとするならば、六郷山寺院はいかに成立していったか、あるいは信仰内容等については、五十七年三月発刊予定の『大分県史 中世篇Ⅰ』の中でくわしく述べるつもりなのでここでは省略する。先学諸氏の御批判、御教示をお願いする次第である。

(大分県総務部総務課県史編さん班県史調査員  
別府市扇山町一九組の三)

## 当会出版物のご案内

(会員一、八〇〇円 会員外二、五〇〇円)

- 【会 告】
- 大分県地方史料叢書(3)「豊前国村明細帳」(一) (下毛郡宮園村等所収) (宇佐郡下麻生村)
  - 大分県地方史料叢書(4)「元禄・天保豊後国豊前国郷帳」(正保郷帳と並ぶ必携史料)
  - 大分県地方史料叢書(5)「佐伯藩温故知新録・古御書写白杵藩旧貫史(1)」(藩別の必見史料)
  - 大分県地方史料叢書(6)「豊後国旧管地沿革記・附録・豊後国各郡沿革記」(旧高旧取調帳の誤りを正す基本史料)

※このほか大分県地方史料叢書(1)(2)の村明細帳シリーズも残部があります。